



馬耳東風

私にはいわゆる馴染みの店というものがない。ないというよりはなくなってしまったのである。泡盛と肉豆腐が人気だった店は、女将さんと2人の娘でやっていたが、夕方になるとすぐ近くの大学の学生や教員でいつもにぎわっていた。ここの女将は客が泡盛を何杯飲んだか記憶しており、「あんたはもう3杯飲んだからダメ」といって4杯目は注いでくれないのが普通だった。当時強いお酒は飲めなかった私は、いつもビールか日本酒であった。ある時泡盛を水で割って飲んでいたら、「こんな美味しいものを水で割って…」と、さも軽蔑したように言われた時の表情をいまだに記憶している。女将のように太ったネコがいて時々客が肉豆腐の肉をやっていた。店は地下鉄工事のため立ち退きとなり、別の場所に移転したが程なくして閉店してしまった。

おでんと茶飯の店は、無愛想な兄弟2人がやっていたが、汁が濁るからと言って昆布は使わず鰹節だけで出汁を取っていた。時々初めての客が昆布巻きを注文すると、「昆布は使っていません」とぶっきらぼうに断っていた。竹輪も「白チクですがいいですか」と聞くのが常だった。普通の焼竹輪は焼いた皮の部分が剥がれて液を濁らせるから使わないと言っていた。汁の澄み具合に徹底してこだわっていたのである。明治時代からの店で、鍋は越冬隊員が借りて南極まで持って行ったそうである。この店もある年末久しぶりに立ち寄ったら閉店の張り紙があり、感無量であった。

カウンターと小上がり併せても10人も入れない赤提

灯は、無口なオヤジが毎朝築地で仕入れて来て調理する魚が絶品で、驚くほど代金も安くてよく通った。かつては「水っぽい酒 不味いつまみ」という看板を出していたが、店に置いてある酒と焼酎の酒蔵から懇願されてはしらずしたようである。この店も夫婦とも歳をとったからと言って田舎に帰ってしまった。かくて私の馴染みの店は全てなくなってしまったのである。

そういえば永井荷風馴染みの店が相次いで閉店したという記事を昨年雑誌で読んだ。荷風の記事「断腸亭日乗」を読んでいると食事をした店の名前がよく出てくる。人生の大半が独居であった彼は、外食が多かったのだろう。一日の記述が少ない戦後の部分をパラパラとめくってみると、「合羽橋飯田屋にて食事。」「午後浅草。アリゾナ食事。」「正午大黒家食事。」等、食事した店だけを記載した箇所が随所に見られる。店の数は限られており、気に入った店に足繁く行っていたことが伺われる。これら荷風がよく行ったことで知られる店のうち、浅草の〈アリゾナキッチン〉と京成八幡駅近くの〈大黒家〉が昨年閉店したのである。アリゾナキッチンは名前から想像できるように洋食の店で、昭和の雰囲気そのままの店であった。大黒家は、荷風が最晩年住んだ市川の住居からほど近い和食堂である。ここでは荷風はいつもカツ丼を注文していたそうで、そのため荷風没後いつの頃からか、〈カツ丼、みそ汁、お新香、お銚子1本〉が荷風セットとして閉店まで供されていたという。いずれも近くに行った折には再訪したいと思っていただけに、一抹の淋しさを禁じ得ない。齢を重ねると言うことは、栄枯盛衰を身近に実感することなのだろうか。（久）